

『般若灯論』第14章⁽¹⁾ 試訳

Bhāvaviveka's Prajñāpradīpa Chapter XIV

望 月 海 慧

<0>第14章の目的 (P.190b2, D.153b1, AP.345a1, AD.297b1, T.92a22)

今度は、同じ様に、空性に対立する主張の特徴を明らかにすることにより、
結合は無自性たることを示す目的により第14章は著される。⁽²⁾⁽³⁾

<1>結合の否定

<1.1>結合による自性の否定

<1.1.1>ある仏教学派による結合の存在論証⁽⁴⁾ (P.190b3, D.153b2, AP.345
b7, AD298a3, T.92a23)

ここに言う。汝が、蘊などは自性が存在しないものである、と説くことは、
世尊の教説の理趣と矛盾する。「色・識・眼の三つが結合することが触であ
る⁽⁵⁾」とでているので、それ故、汝による許容には過失が成立する。勝義として
諸事物は自性が存在すると知るべきである。何故ならば、それらによってから
結合を示すから。およそこの世に存在しないものに対しては、師はそれによっ
てから結合することを説かれない。例えば、亀の毛の如し。世尊の教説に「貪
・瞋・癡の集まったものにより結合する⁽⁶⁾」とあるので、それ故、理由概念をそ
の様に説く効力により諸事物は自性がまさしく存在するものである。

<1.1.2> Bhāvaiviveka の批判 (P.190b6, D.153b5, AP.346a7, AD.298b3, T.92b2)

ここに答える。

見られるものと見る働きと見る者のそれら三つは、二つずつでも全体としても、それぞれ結合することはない。⁽⁷⁾ — 1

見られるものと見る働きと見る者のそれらは二つずつでも全体としても、それぞれに結合することはない、⁽⁸⁾ という語義である。

<1.1.3> 結合の非存在の類推適用 (P.190b8, D.153b6, AP.356b1, AD.298b4, T.92b6)

同じ様に、食と食している者と食されるものと、残りの諸煩惱と残り⁽⁹⁾の諸処も三種により見られる。 — 2

同じ様に食と食している者と食されるものと、食を示す以外の残りの煩惱である瞋なども、瞋と瞋している者と瞋されるものなどを仮設してから、二つずつでも全体の三種によっても、それぞれに結合することはない、という否定が述べられている。食は大食⁽¹⁰⁾の特徴である。煩惱は諸衆生の相続が汚されることである。処を示すことによってから、まだ示されていない残りの「聞・嗅・舌・身・意」というものにも、聞かれるものと聞くことと聞く者や、同じ様に嗅がれるものと嗅ぐことと嗅ぐ者なども、二つずつでも全体の三種によっても、それぞれに結合することはない、⁽¹¹⁾ という否定も述べられている。

<1.2>結合が存在することの否定

<1.2.1>Bhāvaviveka による結合の非存在論証 (P.191a6, D.154a3, AP.347a2, AD.299a5, T.92b16)

今度は、結合は存在しない、と示すために適合⁽¹²⁾を説明する。

他のものが他のものと結合するならば見られるものなどにはその他のものが存在しないので、それ故、結合しないだろう。⁽¹³⁾—— 3

結合は合の同義語である。⁽¹⁴⁾それも他が存在するならば、他と結合するであろうが、見られるものと見ることと見る者や、貪と貪している者と貪されるものなどにも、その他が存在しないので結合しないだろう、という論結の語である。

次のものにより、異類例より異なる (vipakṣad vyavṛtti)⁽¹⁵⁾ ので主張命題の属性 (pakṣa-dharma) を示す。例えば、常性 (nityatva) と非作性 (akṛta-katva) とにおけるその関係も、声には存在しない作性⁽¹⁶⁾が存在する如し。

ここに推論式は、勝義としては、見る者は見られるものや見ることと結合しない。何故ならばそれと異ならないから。何であれ何等かのものより異なるものは、それと結合しない。例えば、自らの自体の如し。

<1.2.2>他の注釈者⁽¹⁷⁾による解釈 (P.191b2, D.154a6, AP.347b2, AD.299b3, T.92b22)

他のものが他のものと結合するならば—— [3a]

というこれに対して、他の者が、「貪などに結合は存在しない。何故ならば、

『般若灯論』第14章試訳（望月）

境と相続が異なって存続するから。結合は、境が異ならないものと相続が異ならないものに直接に存続するものである」と言う。

<1.2.3> Bhāvaviveka による批判 (P.191b3, D.154a7, AP.347b7, AD.299b7, T.92b25)

それに対して、ここに⁽¹⁸⁾ある者が、見られるものなどは境が異ならないし、貪なども境に無いので、「何故ならば、境と相続が異なって存続するから」という理由概念の意味は成立しないものであり、随半関係がない (ananvaya) ので、それは不適當なものに等しい、と言う。

次にでている理趣により

ただ見られる者などに他なるものが存在しないだけでなく、いかなるものも、いかなるものとのあいだに、他なるものとしては成立しない。⁽¹⁹⁾
い。—— 4

聞かれるものと聞くことと聞く者などや、瞋と瞋する者と瞋されるものなど、という語義である。それ故、それらに結合は存在しない。

<2> 他なるものの解釈をめぐる議論

<2.1> 他による関係性の問題

<2.1.1> 対論者による批判 (P.191b6, D.154b3, AP.348a8, AD.300a7, T.92c2)

『般若灯論』第14章試訳（望月）

ここに言う。見られるものと見ることと見る者などは、異なるものとして成立しないので、理由概念の意味が成立しないという過失にならないであろうか。⁽²⁰⁾
⁽²¹⁾

<2.1.2> Bhāvaviveka の反論 (P.191b7, D.154b3, AP.348b4, AD.300b2, T.92c3)

⁽²²⁾
解釈ではない。どの様にか、と言え、

他なるものは他なるものにより異なるのであって、他なるものがなければ他なるものより異なる。—— 5 ab⁽²³⁾

「他なるものは他なるものによってから他なるものとなる」と言うならば、他なるものは存在しないので、それ故「他なるものによって他なるものになる」というのも認められない。⁽²⁴⁾では、何かと言え、⁽²⁵⁾「他なるものは他なるものによって他なるものとなる」と言う言説は仮説である、という語義である。

⁽²⁵⁾
これにより、論証される属性 (sādhyadharma) は、言説を本質とする所依性に依存するものである、と示す。⁽²⁶⁾

何等かのものによってそれであるものは、それより異なるものとして成立しない。—— 5 cd

とは、主張を施設するものである。ここに、推論式は、勝義としては、見ることは見られるものと異なる。何故ならば、言説を本質とする所依性に依存するものだから。⁽²⁷⁾見られるものの自体の如し、というこれにより、(前の)論証の理由概念も理由概念となるから、意味が成立しないものとはならず、「言

『般若灯論』第14章試訳（望月）

説を本質とする所依性に依存する」という理由概念の意味も成立しないものではない。何故ならば存在しないものは成立しないから。どのようにか、と言うと、

もし他なるものが他なるものと異なるのならば、他なるものが存在しなくても成立するであろう。⁽²⁹⁾ — 6 ab

もし「他なるもの」というものが自性により他なるものと異なるのならば、その場合、他なるものが存在しなくても他なるものになってしまう。何故ならば、その自性であるから。例えば、世俗において認められる火は他なるものによらなくても熱いという性質のものになる如し。⁽³⁰⁾

他なるものと異なる他なるものが存在しなければ存在しないので、それ故存在しない。⁽²⁸⁾ — 6 cd

「他性」というそれが⁽³¹⁾、である。それは認められない。見る者と聞く者などによらないで他なるものとはならない。貪している者なども貪などによらないで他なるものにはならない。例えば、世俗においても、火は涼しさによらないで自らの性質により熱いものとならない如し。⁽³³⁾

<2.2>別異性により他となることの問題

<2.2.1>対論者による主張 (P.192a8, D.155a3, AP.350a7, AD.301b7, T.92c17)

しからは、見る者は見ることなどによらなくても他なるものである。何故な

『般若灯論』第14章試訳（望月）

らば、特徴が種々であるから。馬と牛の如し。特徴が種々であることは次のように存在する。見る者は境に現れる識の特徴やそれをともなう行の集まりである。見ることは境たる色彩 (varṇa) や清色が眼識にあることである。色 (rūpa) は色に適する特徴が色彩や形の自体となることである⁽³⁴⁾。それ故、理由概念はその如く説く効力により、見る者は見ることなどより異なるものなので、後の論理と自立論証とにより過失がある、⁽³⁵⁾ と言うならば、

<2.2.2>Bhāvaviveka による批判 (P.192b3, D.155a3, AP.350b7, AD.302a6, T.92c22)

それは正しくない。それ自身により馬と牛とは、他なるものとして成立しないから⁽³⁸⁾。以下のように、「名称が種々であるから」とか「因果が種々だから」などという理由概念による解答もなされる。

<2.3>Vaiśeṣika⁽³⁷⁾ 批判

<2.3.1>Bhāvaviveka による論証式をめぐって

<2.3.1.1>Vaiśeṣika による批判 (P.192b4, D.155a6, AP.351a8, AD.302b6, T.92c24)

Kaṇāda の者により説かれる。見られるものには他性が確かにある⁽³⁸⁾ので、それ故「言説を本質とする所依性に依存するものだから」という理由概念の意味は成立しないものである。

<2.3.1.2>Bhāvaviveka の反論 (P.192b5, D.155a7, AP.351b6, AD.303

a3, T.92c25)

そのような場合も、「他性」という主語 (dharmin) は、他性によることをともなっており、主張命題の主語は一般を述べているので、理由概念の意味は成立しないものではない。

さらにまた、他性をともなっているから他なるものと主張するならば、二つ (の存在) がなくても自らより異なるものとなる。何故ならば、その自体であるから。例えば、火が涼しさなどによらなくても自分の自体により熱いものとなるごとし。

二つ無い他の事物によらない主体を他性と考察するならば、考察しただけである。他の事物によるものは、他性の知覚の原因ではない。何故ならば、他性がその知覚の原因であるから。他と非他とは他性をともなうと⁽³⁹⁾考えても、意味がないことだし、否定は矛盾するものとなる。

事物で所言説ではないものは、後時に、他性をともなうと⁽³⁹⁾考えても、事物は他性をともなっては⁽³⁹⁾いない。何故ならば、事物であるから。例えば、その不可言説の刹那の如くなので、自立論証に過失がある。

<2.3.1.3>Vaiśeṣika による再批判 (P.193a3, D.155b3, AP.353a7, AD.304b7, T.一)

他の Vaiśeṣika の者が言う。「勝義として、見ることは見られるものと異ならない」というその主張の意味は何なのか。もし他性がそれに働かない、と言うのならば、理由概念は不確定なものである。⁽⁴⁰⁾何故ならば、矛盾する主張においても依存をともなうものに働くから。もし他性は実の自性ではない、と言うのならば、⁽⁴¹⁾成立しているものを論証している。何故ならば、他性はその自性であるから。

<2.3.1.4>Bhāvaviveka の反論 (P.193a5, D.155b5, AP.354a4, AD,305a3, T.一)

そのうち、ここに、先の考察に対しても、その様に示す理趣⁽⁴²⁾により、他性は否定されるので、矛盾する主張はないので不確定なものではない。二つ目の考察に対しても、「勝義としては、見ることは見られるものと異なる」と言う場合、我々は「それには他性の知覚と音声の行境の属性はない」と示すので、対論者におけるそのような論証はないから、成立しているものを論証するものでもない。

<2.3.1.5>Bhāvaviveka による他性の非存在論証 (P.193a7, D.155b6, A.P.354b5, AD.305b2, T.92c29)

勝義として、他性に他性の自性はない。何故ならば、一般概念 (sāmānya) と個別概念 (viśeṣa) をともなっているから。例えば、色性のごとし。また、勝義として、他性は他性の知覚と音声が生じる原因ではない。何故ならば、知覚と音声を本質とするものの原因であるから。例えば、色性のごとし。また、勝義としては、他性の知覚は他性をともなう見られるものなどの境たる存在をともなっていない。何故ならば、他性の知覚であるから。例えば、他性の知覚は他性を境とするものではないように。詳しくは前の通りである。

<2.3.2>Bhāvaviveka による他性の否定⁽⁴³⁾

<2.3.2.1>Bhāvaviveka による Vaiśeṣika 批判 (P.193b1, D.156a1, AP.355b7, AD*306a7, T.93a3)

『般若灯論』第14章試訳（望月）

さらにまた、ここに、「他性」というそれは、他なるものに存在するか、それとも他でないものに存在するのか。そのことにより、何になろう。もし他なるものに存在する、というのならば、

他性は、他なるものには存在しない⁽⁴⁴⁾——7 a

それが働くことは、意味のないこととなるからであり、他なるものは他性を離れて⁽⁴⁵⁾いる、という対論者の主張においても成立するからである。

もし他ではないものに存在する、というのならば、

他でないものにも存在しない⁽⁴⁴⁾——7 b

自らと異なるものになるのならば、成立しないから。

さらにまた、他性をともなうものは、それをともなうだけであって、その自性となることは成立しない。牛を連れてくる人は、牛をともなっているだけであって、牛性となることは有り得ないように。

<2.3.2.2>Vaiśeṣika による反論 (P.193b5, D.156a3, AP.356b4, AD.307a3, T,—)

他の者が言う⁽⁴⁶⁾。それをともなっているので、その自体とはならないとしても、その知覚と音声の原因たるものである。

<2.3.2.3>Bhāvaviveka による再批判 (P.193b5, D.156a4, AP.357a1, AD307a6, T.—)

『般若灯論』第14章試訳（望月）

それは、否定をすでに説いているので、反論たり得ない。

<2.3.2.4>Vaiśeṣika による再々反論 (P.193b6, D.156a4, AP.357a2, AD.307a7, T.一)

もし他性により「この他なるものが他である」と明らかにされるので、その自性でもないし、それをともなうことも意味のないことにはならない、というのならば、

<2.3.2.5>Bhāvaviveka による再々批判 (P.193b6, D.156a4, AP.357a7, AD.307b3, T.一)

それは正しくはない。明らかにすることにより明らかにされる対象は、明らかにするものの自性において明らかにされるので、⁽⁴⁷⁾他性により「この他なるものが他である」と明らかにされることによりそれが明らかにされることは意味のないこととなるからであり、他性でないものにより「これは他なるものである」と明らかにすることは有り得ないからである。

<2.3.3>Vaiśeṣika 批判の総括 (P.193b8, D.156a5, AP.357b8, AD.308a3, T.一)

これは主張だけを示している。以下のものにより、一般概念と個別概念と有⁽⁴⁸⁾性⁽⁴⁹⁾と量⁽⁵⁰⁾なども否定される。それ故、以上のように他性は成立しないので、理由概念をそのように説くことによる不成立は存在しない。

<2.4>Naiyayika 批判

<2.4.1>Naiyayika による批判 (P.194a1,D.156a6,, AP.359a5, AD.309a4, T.93a11)

⁽⁵¹⁾
他の者が説く。他性の極と非他性の極とは二極である。それに対し、もし汝の「他性の極は存在しない」と否定を述べるので、非他性の極が摂受されるから、それ故、主張に過失が成り立つ。

<2.4.2>Bhāvaviveka による反論 (P.194a3 D.156a7, AP.359a8, AD.309a6, T.93a13)

ここに答える。そのように示す理趣により、まず他性は存在しない、ということを示したので、

他性が存在しなければ、他なるものや、同一のものは存在しない。⁽⁵²⁾

— 7 cd

他なるものによるから、或いは、それを否定することにより非他性が成立することによるので言説であるからであり、⁽⁵³⁾他性が成立しないことにより非他性も存在しないから、⁽⁵⁴⁾という意味である。どのようにそれを否定するかといえば、勝義として、見る者は見られるものでも非他性でもない。何故ならば、言説を本質とする所依性に依存するものであるから。例えば、見られるもの自身の自体のごとし。⁽⁵⁵⁾同じ様に「有性、因性、果性、時々の智で錯誤や疑惑をとまなうものの境性、因縁の区別による多様性であるから」などという理由概念によっても、推論式が広く示される。それ故、以上のように、非他性も否定されるので、主張に過失は成り立たない。何故ならば、その様に、一性などは成立しないので、

『般若灯論』第14章試訳（望月）

それはそれと結合しないので、他なるものも他なるものと結合しない
—— 8 ab

と章に示す中にでているものによる結論である。

< 3 > 論理学者批判

< 3.1 > 論理学者による前主張 (P.194b1, D.156b4, AP.360a6, AD.310a2, T.93a23)

何に対してであり、その如く、食と食するものとの結合は存在するものである。何故ならば、結合しつつあるものは存在するから。乳と水のごとし。

また、結合は、それをともなう結合が存在することである。何故ならば、依存の語を述べるから。例えば、足枷などにより縛られるごとくなので、結合は結合したものをともなう依存の語を述べる、というそれも存在する。

同じ様に、勝義として、結合する者はそれをともなう結合が存在することである。何故ならば、言説を本質とする所言説であるから。例えば、食物と結合することによる言説を本質とする分による食べる者のごとくなので、結合する者は言説を本質とするものによる所言説たるその結合する者も存在するので、それ故、結合は存在するものである、という。

< 3.2 > Bhāvaviveka による反論 (P194b4, D.156b7, AP.36a1, AD.310b3, T.93a25)

それ故、解釈する。

『般若灯論』第14章試訳（望月）

結合しつつあるものと、すでに結合したものと結合する者とは存在し
(56)
ない—— 8 cd

論証をその通りに示すことにより、他性は成り立たない、という意味である。

<4>論結 (P.194b5, D.156b7, AP.361a3, AD.310b4, T.93a28)

以上で、ここに章の目的は、対論者が章の最初に論証を説いたものの過失を述べることにより、結合は自性のないものであると示したものである。

<5>教証 (P.194b5, D.157a1, AP.361a8, AD.310b7, T.93b1)

それ故「善勇猛よ、色には結合や離は存在しない。同じように、受・想・行・識にも結合や離は存在しない。色・受・想・行・識に結合や離が存在しない。そのことが知恵の完成である⁽⁵⁸⁾」などと説くこれらが証明されるのである。

師 Bhāvaviveka により著された『根本中』の注『般若灯論』より「結合を考察する」という第14章

〔註〕

(1) 本篇は、拙稿「『般若灯論』第11章試訳」（『棲神』第61号、1989、以下「拙稿(1)」）、「『同』第12章試訳」（『同』第62号、1990）、「『同』第13章試訳」（『立正大学大学院年報』第7号、1990）に続くものである。テキストに関しては、「拙稿(1)」の註(1)を参照のこと。

また、江島恵教氏の「Bhāvaviveka/Bhavya/Bhāviveka」（『印度学仏教学研究』第38巻第2号、1990）によると、拙稿(1)以来用いてきた 'Bhāvaviveka' という呼称を改めるべきであろう。しかし、現時点においては判断停止をし、本稿においては、まだ 'Bhāvaviveka' としておく。

『般若灯論』第14章試訳（望月）

- (2) Pに従うのならば、「空性の特徴たる結合が無自性たること」となるが、PPTはDの通りに語義親釈をおこなっている。
- (3) 本章のタイトルは、「saṃsarga ; phrad pa ; 合」を考察すると、いうものである。
- (4) PPTは、“phas kyi rgol ba dag”とするが、次のような仏典の引用を考慮にいれ、この様にした。
- (5) この引用は、Buddhapālitaの Mūlamadhyamakavṛtti (p. ed., 249a4-5), Sthiramatiの『大乘中観釈論』（以下『釈論』, 高麗大蔵経第41巻, p.136a6-7), Prasannapadā (ed. par L. V. Poussin, p.250, 11.4-6) にも見られる。本多恵氏（『チャンドラキールティ中論註和訳』国書刊行会, 1988, p.249）によると, Samyutta-Nikāya, II, 72, IV, 33, 68, 86; Majjima-Nikāya, I, II が指摘されている。該当文章を示しておく, “cakkhum ca paticca rūpe ca uppajjaticakkhuvīññāṇaṃ | tiṇṇaṃ saṅgatiphasso || phassapaccayā vedanā ||” (SN, ed., by M. Léon Feer, reprint, London, 1970 and 1973)
- (6) 現時点では、出典は未確認。教証として引用されることから、一般的な表現と思われる。
- (7) 「拙稿⁽¹⁾」同様、『中頌』に関しては、Prasannapadāからのサンスクリット、並びに、Poussin氏による校訂本のページ数を記しておく。
draṣṭavyaṃ darśanaṃ draṣṭā triṇyētāni dviṣo dviśaḥ |
sarvaśaśca na saṃsargamanyonyena vrajantyuta || [250.9—10]
- (8) この解釈は、チベット訳のでは、偈とほとんど同じ文章である。異なる点としては、'dañ' を付すこと、'gsum' を書くこと、'yod ma yin' を 'med do' とする程度であり、Pandeya氏（The Madhyamakaśāstram of Nāgārjuna, 1988, Delhi, 以下 Pan.）による還元梵文も、これにしたがったものである。
- (9) evaṃ rāgaśca raktaśca rañjaniyaṃ ca dṛśyatām | [251—2]
traidhena śeṣāḥ kleśāśca śeṣānyāyatanāni ca || [251—5]
- (10) tib. : lhag par chags pa, Pan. : rakta.
- (11) 以上のような「瞋」や「聞」への適用に対する説明は、Buddhapālitaの注釈や、Prasannapadāにもみられる。
- (12) tib. : 'thad, Pan. : upapatti.
- (13) anyenānyasya saṃsargastaccānyatvaṃ na vidyate |
draṣṭavyaprabhṛtīnāṃ yanna saṃsargaṃ vrajantyataḥ || [251.9—10]
- (14) tib. : sbyor. Pan. は、この語に当たる文字を還元しておらず、'saṃsargasya pariyāyas' としている。
- (15) S. Watanabe, Glossary of Tattvasaṅgrahapañjikā—Tibetan-Sanskrit-Japanese part I, Acta Indologica vol.5, 1985, による。Pan. : viruddhpakṣa-viparyayāt.

『般若灯論』第14章試訳（望月）

- (16) PPT によると「結合は存在しないと論証する属性は、非他性であることを示している。例えば、無常を論証する属性は、作性であるごとし」と説明される。この様な説論は Dignāga の Pramāṇasamuccaya などにもみられ、そこからの影響と思われる。cf. 北川秀則『インド古典論理学の研究』複製、臨川書店、1985, pp. 185-, 204-226, 同「中期大乘仏教の論理学」『講座仏教思想 第二巻 認識論・論理学』理想社、1974, pp. 205—206, 桂紹隆「因明正理門論研究〔三〕」『広島大学文学部研究紀要』第39号、1979.
- (17) PPT によると「何故ならばそれと異なるから」という (Bhāvaviveka による) 理由概念に対して、他のある注釈者が」となる。漢訳は「有人言」とする。
- (18) PPT によると、'grel pa byed pa ñid kyis' とし、漢訳も「論者言」とする。
- (19) na ca kevalamanyatvaṃ draṣṭavyāderna vidyate |
kasya citkena citsārdhaṃ nānyatvamupapadyate || [252.1—2]
- (20) PPT によると、前の中観による「何故ならばそれと異なるから」という理由概念である。
- (21) tib. : gtan tshigs kyi don ma grub pa ñid kyi skyon du 'gyur pa ma yin nam.
- (22) tib. : bśad pa ma yin te. 「論者」の主張を示す場合は、'bśad pa yin' とされているので、「論者」ではないとも考えられるが、PPT と漢訳とにより、この様に判断した。
- (23) anyadanyatpratitīyānyannānyadanyadṛte 'nyataḥ |
yatpratītya ca yattasmāttadanyannopapadyate || [252.6—7]
本多氏の指摘によると（前掲書、p.249, 注(7)）、参考として、Nyāyasūtra, II. 2. 31 (anyad-*anyasmād-ananyatvād-ityanyatā 'bhāvaḥ*) を掲げている。この 5ab を敵者の主張とするのならば、NS, II. 2. 32 (*tad-abhāve naasty-ananyatā tayor-itaretarapekṣe-siddheḥ*) の方が近いのではないだろうか。cf. 宮坂有勝『ニヤーヤ・パーシュヤの論理学——印度古典論理学』山喜房仏書林、1955, p.163—164, 中村元「『ニヤーヤ・スートラ』邦訳(上)」『三康文化研究所年報』第14号、1981, p.138.
- (24) PPT によると、'rigs pa' i bstan bcos (Nyāyāsāstra) に「いかなる理由概念も正当なものとしては成立しないし、疑惑があるものは別の論証によってなされる」という引用がある。出典は未確認。
- (25) PPT によると、偈の前半部分 (5ab) である。
- (26) 以上の説明は、漢訳では「以種為縁起者。待此種子故。名芽為異。」とするだけである。
- (27) tib. : brjod pa khyad par can sten pa ñid la ltos pa dañ bcas pa ñid yin pa' i phyir, Pan. : vacanaviśeṣāśrayaṇe sāpekṣatvasya sadbhāvāt, 漢訳：「差別語有観故」。

- (28) PPT によると、「他なるものより異ならないから」というものである。
- (29) yadyanyadanyadanyasmādanyasmādapyrte bhavet |
tatanyadanyasmādṛte nāsti canāstyataḥ || [253.1—2]
漢訳は本偈を欠いている。また、Prasannapadā のチベット訳とは、意味が同じものの、表現が多少異なっている。cf. 三枝充麻編『中論偈頌総覧』第三文明社、1985, p.395. ただし、PPT によると pāda ab は「隙間のある語 (sāvakaśavākhya)」として Bhāvaviveka により否定され、pāda cd により「論議の問題 (prakṛtārthatva)」を示している。
- (30) 同様の解釈は『釈論』(p.136b18—20) にも見られる。
- (31) PPT: 「存在しない」とおぎなわれる。
- (32) PPT によると、「前の隙間のある語が」となる。
- (33) PPT はここで第5偈 pāda cd を引用し、「その主張命題を仮設したものは、旨く説明しているので、依存がないものは成立しないし、依存を伴うものは成立する」と示している。
- (34) Abhidharmakośakāirikā, I. 9,
rūpaṃ pañcendriyānyarthāḥ pañcāvijñaptireva ca |
tadvijñānāśrayā rūpaprasādāścakṣurādayaḥ ||
cf. Abhidharmakośabhāṣya, ed., P, Pradhan, Patna, 1967, p.5, 桜部建『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館, 1969, pp.149—150.
- (35) 以上の主張は、PPT によると、五支作法によりなされている。
- (36) PPT によると「何故ならば、牛の特徴である喉下の肉なども馬の特徴によってから異なるものとなり、馬の特徴である後ろ足の蹴り上げ (rdog mjug) なども牛の特徴によってから異なるものとなるが、それらが相互に依存しなければ異なるものとして成立しないので、世俗においても依存がなければ特徴は成り立たないので、対論者による論証の喩例は不完全であるという過失があり、勝義としては牛と馬は生じないので喩例の主語も成立しないので対論者の論証は成立しない」となる。
- (37) 『釈論』(p.136b22) でも、ほぼ同じ位置において、同様の Vaiśeṣika 批判が展開される。また、Vaiśeṣikasūtra (以下、VS) では「結合 (saṃyoga)」を六句義 (padārtha) の徳性 (guṇa) の中に入れているが、本テキストにおけるもの(対象・感覚器官・知覚者)とは概念が異なっており、それらに対する批判は見られない。cf. VS, 1.1.6.
- (38) PPT は「六句義のなかにその『他性 (prthaktva)』というものが確かに存在するから」とする。すなわち、六句義の徳性のなかに示される他性を指している。cf. Vaiśeṣikasūtra, 1.1.6. なお、Vaiśeṣikasūtra に関しては、中村元「ヴァイシュエーシカ学派の原典」『三康文化研究所年報』第10・11号, 1977—8, 金倉圓照『インドの自然哲学』平楽寺書店, 1971, 金岡秀友「『ヴァイシュエーシカ・スート

ラ』試訳『東洋大学文学部紀要』第33号, 1980, などの和訳があり, 前二者に Praśastapāda の Padārthadharmasamgraha (以下 PADS. なお宮坂宥勝氏によると, Bhāvaviveka は Praśastapāda 批判を前提としている。cf. 「パーヴァヴィヴェーカ所引のヴァイシェシカ哲学説の断片」『インド古典論』下, 筑摩書房, 1984) の和訳も含んでいることを記しておく。テキストとしては, M.S. Jambuvijayaji, Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda, を用いた。

- (39) PPT によると「先の事物と異なるものは『他性』という語義を伴っていると考えるのならば」という仮説と「非他であるものが『他性』という語義を伴っていると考えるのならば」という仮説があげられ, Bhāvaviveka による二つの解答に対応している。
- (40) PPT によると「言説を本質とする所依性に依存するものだから」という理由概念により, 「見られるものの自体のように, その見ることに『他性』というその語義は働かない」となるのか, 「対立概念の他性を見ることにも『他性』という語義が働くのか」が不確定となる。
- (41) 「他性」という語義の自性である。
- (42) PPT は第5偈 pāda cd を引用する。
- (43) すでに「他性」に対する批判は行われているが, 以下に他性が存在することの否定が論証される。なお, 「他性」に関しては, PADS (中村元前掲論文, pp.219—220) 参。
- (44) nānyasmin vidyate 'nyatvamananyasmin na vidyate | [254.9]
- (45) PPT は「Vaiśeṣika の主張にも, 属性 (guṇa) は実体 (dravya) に作用するが, 属性たるもの (guṇatva) には作用しないので, 他性の属性は他性を離れていると知られているから」とする。cf. PADS (中村元前掲論文, pp.303—305.
- (46) PPT は「Vaiśeṣika の者」とする。
- (47) PPT の喩をまとめると, 「灯などにより明らかにされる瓶などは, 根の知覚などを明らかにする自性において明らかにされる」というものである。
- (48) VS によると, 一般概念も個別概念も「六句義」の中の一つであり, それらに対しても同様の否定がなされる。cf. VS., 1.2.3., 1.2.20., 8.1.5.
- (49) skt. : sattā, VS., 1.2.7—8. PPT ではこれらの偈と同様の趣旨を述べ, 「実体・徳性・運動」との結合を否定している。
- (50) skt. : pariṇāma. 他性と同様に, 徳性のなかの一つである。VS., 4.1.11. PPT では「事物の自性には, 長・短などの量がなくとも, 「量」という語義を伴っているので, 長・短などの知覚が生じる」と述べられ, 同様の主張は PADS (中村元前掲論文, pp. 216—218) にも見られる。
- (51) PPT によると「Naiyāyika の毘 (sgyu thabs) により」とする。論点としては他性を否定することにより, 対立概念である非他性を成立させることになってし

『般若灯論』第14章試訳（望月）

まう、というものである。

(52) avidyamāne cānyatve nāstyanyadvā tadeva vā || [255.5]

(53) PPT は「例えば、短により長を仮設する冒説であるごとく」という喩例をあげている。

(54) PPT は「バラモン（階級）が成立しなければバラモン以外のものも成立しないごとし」とする。

(55) tib. : lan 'ga' śes pa log pa 'am / the tshom can gyi yul ñid, Pan. : kā-dācitkaṃ jñānaṃ mithyāsāṃśayikajñānaviṣayatva.

(56) na tena tasya saṃsargo nānyenānyasya yujyate | [255.12]

saṃsṛjyamānaṃ saṃsṛṣṭaṃ saṃsraṣṭā ca na vidyate || [256.10]

(57) PPT によると「論理学者 (rtog ge ba ; tārkiika) が、現に結合しつつあるものとすでに結合したものとこれから結合するものとは存在する、という観点より、結合は存在すると論証することを (Bhāvaviveka が) 否定する」とされる。この事は、第8偈の pāda cd に対応する。

(58) Suvikrāntavikrāmipariṣcchāprajñāpāramitāsūtra (text に関しては拙稿(1) 註(4)に従う), skt. : p.29,11.20—24, 戸崎宏正氏和訳 : p.132,11.9—11.

【付論1】本稿は『印度学仏教学』第39巻第2号掲載の「Atiśa の Prajñāhṛdayavyākhyā について」に対する注である。スペースの都合上、本編において論じきれなかったこともあるので、この場を用いて記すことにする。なお、前記の拙稿を著す際、D. S. Lopez, Jr., *The Heart Sūtra Explained: Indian and Tibetan Commentaries*, Albany, 1988, を参照することができなかった。本書は、タイトルに示されるように、『般若心経』の諸注釈を英訳し、パラレルに並べていることから、それぞれの比較を容易にしている。しかしながら、ここでは、拙稿の本文との関係もあるので、注を記すに当たっても本書への言及は控えることにする。

1) ① Vimalamitra, *Prajñāpāramitāhṛdayaṭīkā*, P. ed., No.5217, D.ed., No. 3818, ② Jñānamitra, *-vyākhyā*, P.ed., No.5218, D.ed., No.3819, ③ Vajrapāṇi, *-ṭīkā arthapradīpa-nāma*, P.ed., No.5219, D.ed., No.3820, ④ Praś-

『般若灯論』第14章試訳（望月）

- āstrasena, -ṭikā, P. ed., No.5220, D.ed., No.3821, ⑤ Kamalaśīla, -nāma-
ṭikā, P.ed., No.5221, D.ed., 欠, ⑥ Dīpaṃkaraśrījñāna, Prajñāhṛdayav-
yākhyā, P.ed., No.5222, D.ed., No.3823, ⑦ Śrī Mahājāna, -arthaparījñ
āna, P.ed., No.5223 D.ed., No. 3822. この他, Vairocana (Śrī Siṃha) に
よる Mantravivṛta-prajñāhṛdaya-vṛtti, P.ed., No.5840, D. ed., No. 4353,
がある。このうち Kamalaśīla のものを除いたものが、榛葉元水氏（『西藏文般若
心經註釈全集』相模書房, 1938）により、デルゲ版の謄写版として出版されている。
なお⑥に対しては、芳村修基氏による和訳（『インド大乘仏教思想研究 カマラシー
ラ思想』百華苑, 1974, pp.168—173）がある。cf. E. Conze, *The Prajñāpā-
ramitā Literature*, second ed., Tokyo, 1978 pp. 71—74.
- 2) テクストに関しては、前註を参照のこと。翻訳者は、著者自身と Tshul khriṃs
rgyal ba とである。注釈の方法としては、PPHの文句を各々注釈していくという
形態ではなく、經典の構造を解釈するものである。
- 3) この 'bdag gysis' を誰と解釈するのか、問題となる。A. Chattopadhyaya 氏 (At-
iśa and Tibet, repr., Delhi, 1981, p.452) は、'by me' とするだけで、確定を
していないが、E. Conze 氏（前掲書, p.71）は、本テキストの著者を 'Dīpaṃkara-
śrījñāna and Legs pa'i śes rab' とし、従って、この 'bdag gysis' を Legs pa'i
śes rab と判断したのであろう。
- 4) 同書によると「この後、彼にお願いされ、Tarkajvāla を翻訳し、その注釈として
大小二つの Madhyamakopadeśa を著した」とある。cf. 『青史』四川省, 1984,
p.316, 羽田野伯猷「カーム派史」『チベット・インド学集成』第一巻チベット篇
I, 法蔵館, 1987, pp.85—86, G. N. Roerich, *The Blue Annals*, repr., De-
lhi, 1979, pp.258—259.
- 5) tib.: mdo rgyas 'brin gsum. すなわち、『十万頌』・『二万五千頌』・『八千
頌』の『般若経』がこれに相当する。cf. 張怡主編『藏漢大辭典』上, p.559. なお、
このような表現は、KT, さらに、Haribadra の Abhisamayālaṃkāropadeśa-
śāstravṛtti にもみられることから、この時点に置いて定型句となっていたというこ
とがうかがえる。cf. 真野龍海『現觀莊嚴論の研究』山喜房仏書林, 1972, pp.96—
98, 天野宏英「現觀莊嚴論釈の梵文写本（6）」『島根大学教育学部紀要（人文・社
会科学）』第23巻第1号, 1989, pp.4—5.
- 6) | gleñ sloñ ba dañ skabs dañ ni || bsan par gtogs pa 'dus pa dañ |
| gleñ gñi dris dañ lan btab pa || de ni rnam pa bcu gcig dañ ||
| mthun 'gyur rjes su yi rañ dañ || rnam pa brgyad du bsdu pa yin |
| de la 'khor gwis bskul ba dañ || yañ dag par sdud par byed pas |
この前の偈は、九音節からなるものであり、婦敬偈に相当するものである。また、本
偈は、VTの総論を示すものであり、これにより論が展開していく。
- 7) VTに「evam」などとでている最初の三語により『導入』がなされる」とあり、

『般若灯論』第14章試訳（望月）

この解釈に従ったといえる。これに似た表現は Kamalaśīla の Vajracchedikāprajñāpāramitā-ṭīka にも見られる。そこでは經典の略義を五分し、その中に 'gleñ gzi' と 'gleñ bslañ ba' とを入れているのだが、そのタームの意味するところは、この場合とは異なっている。cf. 東武「カマラシーラ造『金剛般若経広註』の研究—(1)』『高野山大学論叢』第12号, 1977, p.139.

- 8) śraddhāvātām pravṛtṭyaṅgam śāstā paṛśac ca sāksṇi |
deśakālau ca nirdiṣṭau svaprāmānyaprasiddhaye || 3 ||
saṅgītikartā bke hi deśakāpalakṣitam |
sasākṣikam vadan vaktā prāmānyam adhicacchati || 4 ||

E. Frauwallner, Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung, WZKSO 3,1 959, p.140, G. Tucci, Minor Sanskrit Texts on the Prajñāpāramitā, 1. The Prajñā-pāramitā-piṇḍārtha of Dinnāga, Journal of the Royal Asiatic Society, 1947, p.56,59,68, 服部正明「ディグナーガの般若経解釈」『大阪府立大学紀要』第9巻, 1961, p.122.

- 9) rañ tshad mar grub par bya ba'i phyir yul dañ dus dañ 'khor dbaṅ du
byed ciñ dbaṅ dañ bcas par smras na | smra ba po tshad ma yin par khoñ
du chud par 'gyur ro zes che ba gañ dag smra ba de ni bdag gis khoñ du
ma chud de | (VT, P. ed., 287b2—3)

10) 本テキストに関しては、平成二年度第一回身延山短期大学学内研究会において、口頭発表を行ったが、特筆する程でもないと思えたので、別稿を記すつもりはない。それ故この稿をかりて、若干のコメントを付すことにする。まず最初に、prajñāpāramitā を説く対象を、1) 菩薩、2) 欲・色・界の天衆、3) 仏国の天衆、とし、八種の義が説かれた、とする。この八種の義とはAAの章に従ったものであり、それを、1) 一切相智、2) 道智と一切智、3) 一切相等覚から法身現等覚間で、と分けている。また他の注釈には見られないものとして、「正しい認識根拠 (pramāṇa) は二つである」とし、直接知覚 (pratyakṣa) と推論 (anumāna) とに関連づけた解釈も見られる。なお本テキストには、芳村修基氏による和訳が存在する。前注1) 参。

11) KTの区分は前注参。PHVの区分に関しては、以下の拙稿の分類がそのまま当てはまる。従って、KTは、八義とするものの、それによるPPHの分割は行っておらず、PHVとの対応は不可能となる。

12) 本テキストは、PPHの文句に対する注釈であるが、その構造解釈としては七義をあげている。すなわち、1) 因縁、2) 知に入ること、3) 空性の特徴、4) 知の行境、5) 知の性、6) 知の果、7) 知の摂受、とである。また、その中には五道のタームは見られない。

13) すなわち、1—2) 'pañca skandhās tāms ca svabhāvasūnyān' から 'vijñānāni ca sūnyatā' まだが「資糧道」と「加行道」であり、3) 'evam śāriputra' から 'asampūrṇāḥ' まだが「見道」であり、4) 'tasmāt tarhi śāriputra' から 'nā-

『般若灯論』第14章試訳（望月）

- prāptih' まだが「修道」であり、5) 'tasmāc chāriputra' から 'āsṛitya' まだが「無学道」である、としている。
- 14) はっきりした引用ではないので、出典の確定はできていない。恐らく『大乘阿毘達磨集論』決択分中諦品（大正新脩大藏經，第31卷，p.682b18—）が相当するであろう。cf. N. Tatia, *Abhidharmasamuccayabhāṣyam*, Patna, 1976, p.76—, W. Rahula, *Le Compendium de la Super-doctrine d'Asaṅga*, Paris, 1971, p.104—.
- 15) tib. : lhag mthoñ thab pas ni rnam par rtog pa dañ bcas pa'i gzugs brñan gyi dmigs pa rnam pa gñis thab pa yin no || de ltar na mthoñ ba'i lam btap pas dños po'i mtha'i dmigs pa thab pa yin te | dgos pa yoñs su grub pa'i dmigs pa'añ thab ste | (ed. par E. Lamotte, Paris, 1935, pp.115—116) . cf. 菩提流支訳『深解脱經』大正，第16卷，p.679a5—14，玄訳『解深密經』同，p.702b6—26，野沢静証『大乘仏教瑜伽行の研究』法蔵館，pp.372—378.
- 16) cittātulanānidhyānānyabhikṣaṃ bhāvanāphatthā |
nirvedhāṅgheṣu dṛṇmārge bhāvanāmārga eva ca ||
ed. by Th. Stcherbatsky and E. Obermiller, *Abhisamayālaṃkāra-prajñāpāramitāupadeśa-śāstra*, Bibliotheca Buddhica XXIII, repr., Tokyo, 1977, p.25,45, cf. 真野龍海前掲書，p.190. また，VTでもAA (IV,6—7) が引用されている。
- 17) ただし，SNSでは「過去に止と観とを得ることにより有分別と無分別の影像の所縁が得られる。現在に見道を得ることにより事物の辺際在所縁が得られる。後々に修道に入って，これら三つの所縁を作意すれば……」というもので，PHVのコンテキストにおける用法とは異なっている。
- 18) VTでは 'samanuṣāyati' の解説部分において引用される。P.ed.,291b2—5.
- 19) VT, P.ed.,295b6—8.
- 20) Jñānamitra も同様に読んでいる。P.ed.,305b8.
- 21) 「是諸法究相。不生不滅。不垢不淨不増不減」とされている。
- 22) すべての翻訳を調べてはいないが，中村元氏（『般若心経・金剛般若経』岩波文庫，1960），平川彰氏（中村元編『大乘仏典』筑摩書房，1974），金岡秀友氏（『般若心経』講談社文庫，1973）といった代表的なものは，漢訳と同じ読み方をしている。
- 23) 如真性智は，1) 所縁の対象，2) その随念の因，3) その果，とをえることが無上である，というこの三つにより示されている。
- 24) VTでは，その他，Vairocanābhisambodhi, Samādhirājasūtra が数度引用され，āgama 以外では，Nāgārjuna の Yuktiśaṣṭikā, 1,12,19, Dharmakīrti の Pramāṇavārttika, I. 192 が引用される。
- 25) VT.P.ed.,294a5, 294b2, において「勝義/世俗」のタームを用いた解釈が見ら

『般若灯論』第14章試訳（望月）

れる。

- 26) 「三昧は心一境性の特徴である」(P.ed.,288a6) というもので、同じ表現は *Sthiramati* の *Triṃśikāvijñaptibhāṣya* にもみられる。S. Lévi, *Vijñaptimātrasi-ddhi*, Paris,1925, p.26,1.5, 荒牧典俊訳「唯識三十論」『大乘仏典15世親論集』中央公論社, 1976. p.91.
- 27) P.ed.,293a5.「色即是空。空即是色」を三性説により説明している。ここでは、依他起性における分別の色と、円成実性による空性の色との同一性を示している。これと同様の文章は *Vasubandhu* の *Madhyāntavibhāgabhāṣya* の第16偈後半の解釈部分に見られる。cf. 長尾雅人訳「中辺分別論」『大乘仏典15』同上, p.284, G. M. Nagao, ed., *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, Tokyo, 1966, p.44, 山口益編『漢藏対照弁中辺論』再版, 鈴木学術財団, 1966, p.44, 同『中辺分別論釈疏』同上, p.219, same, *Madhyāntavibhāgaṭīkā*, same, p.138—139.
- 28) 彼を、中観派、唯識派、と確定すること自体に無理があるのだろうが、本テキストに限って言えば、瑜伽行派文献への依存度が大きいことから、このように判断できる。

【付論2】本稿は第43回日蓮教学研究発表大会（平成2年11月15日）において口頭発表した原稿をまとめたものである。掲載スペースがないために、さらに、この場を用いて記すことにする。「付論1」に示した論文と関連するものであり、多少重複する論証もあるが、そのまま記す。なお、文献上の論拠など、前注により補えるので、ここでは発表原稿の形態をそのまま残して表わす。

Vimalamitra の *Prajñāpāramitāhṛdayaṭīkā*

まず、本テキストの概観を述べておく。インドにおける『般若心経』の注釈書としては最も長い物であり、注釈の方法としては『般若心経』の一々の文句を引き、それに対して他の経典を引用しながら注釈するというものである。引用される経典はというと、最も多いのは、*Vairocanaḥhisambodha* であり、4回引用される。あとは、*Samdhinirmocanasūtra* が三回、*Samādhirājasūtra* が三回である。『般若経』では、『二万五千頌』が二回、『八千頌』が一

回である。その他、『十地経』など十程の経典・タントラが引用される。論書では、Maitreya の Abhisamayālamkāra IV.6—7, Nāgārjuna の Yuktiṣaṣṭikā, 1, 12, 19, Dharmakīrti の Pramāṇavārttika, I, 192, そして、出典の確認はできていないが、Pancavimsatisāhasrikāprajñāpāramitopadeśābhisamayālamkāra, が引用される。以上のことから、本テキストの特徴を挙げるのならば、他の注釈書にくらべると、経典並びに論書の引用が多く、中でも Vairocana bhisambodha が最も多い上、他にもタントラの引用が目につく。

では、テキストの内容に関する考察を述べることにする。まず、その導入部であるが、ここに Dignāga 批判と思われる文章がある。Vimalamitra は初めの偈に示すように、『般若心経』を八分割する。その要素には、「導入・時・衆会・因縁」が上げられている。それらに対して説明する上で、「自らが正しい認識根拠であると成り立たせるために、場所と時と衆会を示し伴っていれば（経典を）説く者のは正しい認識根拠であると領受される、と過度に説くそれらは、私によっては領受されない」と述べている。Atiśa は彼の『般若経』の注釈において、この文章を引用し、この批判対象は Dignāga であるとした上で、彼の『八千頌般若』の注釈である Aṣṭasāhasrikāpiṇḍārtha の第3, 4偈を引用する。この偈は、先程の Vimalamitra による批判内容と全く同一内容である。したがって、このコンテキストにおいて彼が Dignāga を想定していたかどうかということの判断に関しては、Atiśa の補足説明に従い、Dignāga 批判を根拠に置いていたこと言うことができる。

次に、「三昧に入る (samādhiṃ samāpannaḥ)」を解釈する際、Nāgārjuna の Yuktiṣaṣṭikā 第1偈を引用するのだが、その直後に「三昧は、心一境性 (cittasyaikāgratā) の特徴である。」と述べている。これと全く同じ表現は Sthiramati による Triṃśikāvijñaptibhāṣya にもみられ、そこからの引用とも考えられる。この事から、Vimalamitra は、唯識学派・中観学派を特に

区別すること無く、それぞれを文脈に応じて引用していたことがうかがえる。このような事は、他所にもみられ、全く同一のケースとして「色は空より異ならず、空は色より異ならない (rūpaṃ na pṛthag śūnyatā śūnyatāyā na pṛthag rūpaṃ)」を解釈する際、やはり Yuktiṣaṣṭikā の第19, 12偈を引用する直後に、「異門も、分別の色は依他起の特徴である。妄分別性たる能執・所執の二つの特徴による分別が永遠に離れるような空が法性の色であり、円成実の特徴である。依他起と円成実のどちらも空性が色である、というこれにより一性 (ekatva) を示している。空性たる円成実と依他起の特徴が同一のものとして把握されるので、空性は色である、と言う事が説かれている」と述べている。これに関しては、名称の指摘がないことから、はっきりした引用であるのかは確定できないのだが、Vasubandhu による Madhyāntabhivangabhāṣya の第3章第16偈後半の注釈の部分にはほぼ同様の文章が見られる。ほかのテキストからの引用という可能性も残るが、唯識学派の文献であることには違いないであろう。以上の二点の例のように、中観・唯識の両学派を区別すること無く並列に並べた上で、それぞれを都合のいいように解釈して引用しているといえる。

次に、これは『般若心経』の漢訳とも関連する問題がある。それは漢訳の「是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不増不減。」、サンスクリットでは「sarvadharma śūnyatālakṣaṇā anutpannā aniruddhā amalāvimalā anūnā asaṃpūrṇāḥ」の解釈にあたる部分である。この「śūnyatālakṣaṇā」のコンパウンドの解釈を、チベット訳 (Vimalamitra, Rin chen sde, Nam mkha') と漢訳 (鳩摩羅什, 玄奘, 法月重, 般若共利言等, 智恵輪, 施護訳。ただし、敦煌の法成のみ、チベット訳と同様である) とは異なった読み方をしている。まず、漢訳の解釈からみると、このコンパウンドを「sarvadharma śūnyatā-lakṣaṇā」すなわち、「諸法は空性を特徴とする」と読み、その特徴が六種あげられている。一方、チベット訳の方は、「sarvadharma śūn-

yatā-*alakṣaṇā*」すなわち、諸法は空たるものであり、無相（特徴のないもの）であり、」と、諸法の在り方として、八種類をあげている。チベット訳の翻訳者の一人にも入れられているヴィマラミトラは、この解釈をどのように述べているのかという、それぞれの項を説明してから、「般若波羅蜜の勝れた意味は、空性などの三解脱門である。それは、それらの八つの在り方によりまとめられている。それら八つの在り方は、次の順序通りである。すなわち、空たることと特徴のないこととの二つによるものは空性の三昧である。中間には、生・滅・雑染・清浄を否定することによる無相の三昧である。あとの二つによるものは、無願の三昧である。」と述べている。この様に、明確に八つの項目に分類し、しかもそのうちの一項目として、「特徴の無いこと (*alakṣaṇā*)」をあげている。Atiśa はこのコンテキストにおいて、彼の名前を引用し、述べているのだが、この八支への分割は、彼独特のものではない。というのは、Kamalaśīla や Jñānamitra の注釈においても、このコンパウンドを同様に読んでいる。これらほかの注釈書が、Vimalamitra 以降に著され、そこからの適用解釈である、という可能性も存在するが、Atiśa 以外の者には、積極的根拠はない。また、年代的には、漢訳のほうが古いと言う事もあり、どちらの読み方が正しかったのかという判断は下せないが、インドにおける後期の仏教においては「śūnyatā *alakṣaṇā*」という読み方が一般的であったということがうかがえる。

以上、ほんの数点ではあるが、Vimalamitra の注釈より、彼独特の解釈を上げた。他の論者の批判は、Dignāga に対するものだけで、その他の論者の引用は経証としてのものだけである。また、他の『般若心経釈』への言及は無いものの、後代に Atiśa により引用されるなど、それなりに認められていたものであるといえる。また、Vimalamitra の思想的背景を考えるのならば、中観派・瑜伽行派の文献を都合のいいように取り上げているものの、この文献のみからは、積極的に中観思想を取り上げることはできなかった。どちらかという

『般若灯論』第14章試訳（望月）

のならば、瑜伽行派の文献などが目につき、その流れの中に入れてたい気もする。ただし、最初の述べた「頓門派」の思想を含めた上で、彼の立場を考える必要がある、このテキストのみでは、判断できないので、保留せざるをえない。

【付記】本誌前号に掲載の「『般若灯論』第12章試訳」の p.16 の「<1.3.3.4.1>外道の主張」並びに同注（46）に関して、東京大学の江島恵教先生より「Diganbhara, ジャイナ教徒」と御教示いただいた。従って、「<1.3.3.4>」は「Diganbhara 批判」と直される。また、大阪教育大学の古坂紘一先生には、『般若灯論広注』における諸テキストの引用などの御教示を、さらには、五島清隆氏には『般若灯論』に引用される『梵天所問経』に関する御教示をいただき、この場をかりてお礼申し上げます。本試訳も本章以降は、梶山雄一先生等の和訳研究が章によっては存在する。今は、James Joyce が *Finnegans Wake* の最後の “A way a lone a last a loved a long the” と記したような状況である。